ウスキモンノメイガ（中宮．富沢，1977）
オオウンホソハマキ（白山．川辺，1971）
タカネハイイロハマキ（室堂平．川辺，1970）

22. 小笠原の蝶の生態

小路嘉明（茨木市）

筆者は過去4回にわたり小笠原（母島，父島，兄島）へ渡島した．そこで観察した蝶の生態についてに紹介する．

種名	アゲハ	ウスキシロチョウ	ウスイロコノマチョウ	ウラナミシジミ	オガサワラシジミ	マルバネウラナミシジミ	イチモンジセセリ	オガサワラセセリ
発生期	3—11月（通年発生と思われる）	3？—11月	通年	通年	通年（ただし，2月は未記録）	10—12月	不詳	通年（但，2月未記録）
食草	栽培ミカン類 アウザンコショウ☆ ヒメザンショウ☆	ハネミセンナ (*Cassia alata*) インドサイカチ？他1種 (*Cassia* sp.)	セイバンモロコシ オガサワラスズメヒエ サトウキビ イヌアワ（兄☆） シュロガヤツリ☆ ギョウギシバ	クサセンナ ハマナタマメ	オオバシマムラサキ テリハコブガシ（クスノキ科） コブガシ* ** ハチジョウグワ	モモタマナ	ワセイヌビエ	ハチジョウススキ☆*** サトウキビ
訪花植物など	ランタナ ナガボソウ		吸汁：タコノキ腐果 ガジュマル腐果	シマザクラ	シマザクラ オオバシマムラサキ アゲラータム モンテンボク ムニンヒメツバキ	モモタマナ	不詳	ランタナ ナガボソウ
活動時期	日中	日中	夕刻	日中	日中 ♂はテリトリーを張る	日中(11月) 夕刻(10月)	不詳	夕刻♂はテリトリーをつくる
産卵形式	食草の新芽～若葉に1卵ずつ	食草の新芽～若葉の葉裏に1卵ずつ	食草の成葉裏面に1～数卵	つぼみに1卵ずつ	原則として，成葉裏面に1卵ずつ	つぼみに1卵ずつ	不詳	成葉表面に1卵ずつ***
幼虫の静止位置	食草の葉表	食草の葉表	葉裏～茎	つぼみ・花の中	花茎	花穂	巣内	巣内
蛹化位置	食樹の枝	食草の複葉中脈上（裏面）	食草上	根ぎわの石の下*	食樹の根ぎわの石の下*	不明	巣内（飼育）	巣内（飼育）
その他					卵寄生蜂 幼虫寄生蝿（未同定）確認			

*大西公一氏による．　○詳細は Crude (11, 13, 14) に掲載済．
**小島圭三，中村慎吾氏による
***青山潤三氏による
☆ 未発表

23. 日本産モンキチョウ属の一未記録種について

白水　隆（九大・教養・生物）

日本では未記録のモンキチョウ属の1種，*Colias fieldii* Ménétriès が四国および九州で採集されていることが判明したので報告したい．調査した標本は下記の2頭．

1♂，徳島県徳島市丈六町，1965年11月13日，平井雅男氏採集．

1♀，福岡県遠賀郡芦屋町浜口，1964年10月，石川匡宏（まさひろ）・石川延寛（のぶひろ）氏採集．

この2頭の標本による限り R. Verity (Rhopalocera Palaearctica, 1905—1911) の図示した中国産の亜種 subsp. *chinensis* Verityよりも，むしろ原名亜種（演者はネパール，アフガニスタンの標本と比較した）に近い．

現在のところ，本種は日本の土着種とは考え難く，大陸からの迷チョウまたは迷チョウに由来する一時的な発生個

体であったと推察される．なお日本で発見されたこの機に，本種の和名としてダイダイモンキチョウ（またはフィールドダイダイモンキチョウ）と呼ぶことを提唱したい．なお精細については“蝶と蛾”に近く発表の予定である．

24. アゲハチョウ上科の中胸側板の特異性　　江　本　　純（南山大・生物）

アゲハチョウ上科の中胸側板の形態は，他の鱗翅類のそれとはかなり異なる特異なものである．その特徴は paracoxal suture の背方への張出しと部分的消失，anepisternum の退化，preepisternum の退化，などである．これらの諸特徴を兼ね具えているものには，ジャコウアゲハ・アオスジアゲハ・ナミアゲハ・モンシロチョウ・サカハチチョウなどがあげられる．ところが，これらの諸特徴をすべてのアゲハチョウ上科の種が兼ね具えているわけではない．たとえば，アゲハチョウ科のテングアゲハは大きな anepisternum と完全な preepisternum を残しているし，ホソオアゲハでは paracoxal suture の消失は起こっていない．同じように，ウラギンシジミやアカシジミやテングチョウなどにもこのようなことが観察される．また t-p 13 という筋肉の付着する位置に関しては原始的なものから特化したものまでの連続的な変異がみとめられる．

系統発生のパターンには，主に homology，homoiology，parallelism，convergence などが考えられている．アゲハチョウ上科の中胸側板の変異の状態をみると，それぞれの科の内部においてすべての諸特徴を兼ね具えたものから原始的な特徴を部分的に残しているものまで存在し，また諸特徴を兼ね具えたものでは，系統の異なるものでも類似した形態を示している．このような変異のパターンは，アゲハチョウ上科全体の中胸側板が共通する方向性をもって進化してきたことを示していると考えられ，このような変化過程を homoiology に相当すると思われる．

25. 鱗翅類の蛹の刺毛について　　中　村　正　直（東京都）

鱗翅類の蛹の刺毛が幼虫のそれと相同であることは，すでに知られている．個体発生的にみて，原始的な蛹の刺毛は幼虫の刺毛と同一であり，進化した蛹の刺毛は成虫の刺毛と同じと考えられる．成虫の刺毛は完全な二次刺毛であり，感覚器官としての機能は失われていると思われるので，この見方からすれば無毛と同じである．従って無毛または二次刺毛のみの蛹――Sphingoidea, Bombycoidea（ここでは Saturnioidea を含める），Rhopalocera――が最も進化した段階にあると認められる．一般に，蛹では幼虫刺毛と同一の状態から進化するにつれ次第に刺毛が消失し，遂に無毛（二次刺毛化）に至るとみられるが，刺毛消失は不規則に起こるのではなく，大別して次の順序で進行する．まず，腹部域（V, SV, SL），次いで背部域（D），最後に気門域（SD, L）である．恐らく感覚器官としての役割の重要度に差があるためであろう．刺毛が消滅して行き，最後に残るのは L_1 である．この例は *Liocrobyla* 属や *Cuphodes* 属にみられる．一般に Gracilarioidea に属するハモグリガは刺毛減退の点で分化が進んでいるように思われるが，これがハモグリという習性に起因するものかどうかは軽々しく断定出来ない．ハモグリの習性をもつ他の上科に属する蛾で必ずしも刺毛消失が進んでいるとはいえないからである．しかし分化した Macrolepidoptera のなかで，土中蛹化するものはそうでないものに比べ，刺毛消失の進む傾向が認められる．これについては蛹化習性の進化現象と平行的に考えてみなければならないだろう．気門域の刺毛の変化は主として上科や科の特徴として現れ（Drepanoidea や Pyralioidea），背部域の変化は亜科や族の区別点として認められることが多いが，腹部域の変化は属や時によっては種によっても異なることがある．この点でも各刺毛の重要度にそれぞれ違いのあることが分る．

26. タテハチョウ亜科の幼生期の研究 I（1齢幼虫の1次刺毛配列）　　中　西　明　徳（九大・教養・生物）

Nymphalis antiopa を除く日本土着のタテハチョウ亜科の14種，および *Hypolimnas bolina*, *H. missipus*, *Precis hedonla*, *P. iphita*, *P. lemonias*, *P. atlites*, *Doleschalia bisaltide*, *Anartia fatima* の12属22種の1齢幼虫を調べ，本亜科の刺毛配列，刺毛の形状の基本型を推定した．これに基づき，各種のもつ apomorphy を明らかにした．頭部刺毛配列は全種においてきわめて均一であり，特化は認められなかった．胴部刺毛配列は *Nymphalis*, *Aglais*, *Kaniska*, *Inachis*, *Araschnia*, *Vanessa* の6属においては全く特化が認められなかったが，残りの6属において顕著な特化が見られた．*Polygonia* は前胸，第10腹節を除く各体節でL刺毛の数の増加という特化を示し，これは本属の autapomorphy と考えられる．しばしば属の帰属が問題になるエルタテハも1齢幼虫に基づく限りは疑いもなく *Polygonia* である．*Precis*, *Hypolimnas*, *Doleschalia*, *Anartia* の4属は第8腹節のD1およびD2刺